

東海農政局長賞

【 五ヶ所湾きらりふれあいの会 】

代 表 者：森 岡 基 郎

所 在 地：三重県度会郡南伊勢町五ヶ所浦 3 0 5 7

1 地域の沿革と概要

南伊勢町は、平成17年10月1日に度会郡南勢町および南島町が対等合併し誕生した町で、紀伊半島沿岸東部、度会郡の南端に位置し、町の南側は熊野灘（太平洋）に面し、リアス式の海岸線を有している。

海岸線を中心に町域の約6割が伊勢志摩国立公園に指定されるなど、温暖な気候とともに良好で豊かな自然環境に恵まれている。

南伊勢町の総面積242.93 k m²のうち山林が85%を占める地形は全般に急峻で、平坦部は極めて少なく、海に面した僅かな平地に集中する沿岸部漁村集落と耕地と集落が散在する農山村部が形成する典型的な農山漁村地域である。



[南伊勢町（南勢町） 五ヶ所湾]



当地区の基幹産業は水産業で、マダイ・ハマチ・真珠・アオノリなどの養殖業、イセエビなどの刺網漁や定置網漁のほか、古くからカツオ漁が盛んで、国内有数の遠洋漁船の基地を有している。

一方農業では、百年以上前から温州みかんの栽培が行われおり、「マルゴみかん」として、県内外に知られている。

2 むらづくりの動機、背景

【地域の産業を取り巻く現状】

農林水産物輸入の増大による価格の低迷、人件費の増大など、南勢地区の暮らしを支えてきた農林業と漁業を取り巻く環境は厳しく、また、伊勢志摩全体の観光客の減少、レジャーの多様化と相まって、南勢地区への観光客等の入込客数も減少している。



このため、若年労働者が就労の場、生活の場を求め都会へと流失するなど、過疎化と高齢化が進んでいる。

【様々な地域づくりの取組が誕生】

こうした状況の中、地域の活性化や低迷するミカン農家の収入確保などのため、平成7年に観光ミカン狩園、地域の物産販売等の拠点施設「ないぜしぜん村」が、平成12年、廃校を活用した宿泊体験交流施設「海ぼうず」が整備されるなど、南勢地区内において複数の取組が生まれた。

【多様な取組の連携～「五ヶ所湾きらりふれあいの会」の誕生】

このような取組が行われている中、それぞれが各々に活動を進めるのではなく、町民、関係団体、行政が相互に連携しながら一体となり、「ほんもの農林漁業体験」を通じた都市住民との交流を図っていく必要があるとの意見が確認された。

この結果、様々な体験メニューを都市住民等に提供する集客交流事業を地域ぐるみで展開していく事を目的として、平成15年6月、32の団体及び個人が所属する「五ヶ所湾きらりふれあいの会」が誕生した。

【「五ヶ所湾きらりふれあいの会」の目指すもの】

農林漁家の有志が中心となり、南勢町、観光協会、三重県の支援・協力のもと本物の農林漁業体験を通じた「心の交流」、「地域の活性化」、「女性や高齢者の生きがいづくり」を目指している。

3 むらづくりの推進体制

【体験メニュー等の実施体制】

「五ヶ所湾きらりふれあいの会」では、各団体の代表などからなる役員会を月1回開催し、「海と山の暮らしとふれあう本物の体験」の提供をコンセプトに体験メニュー・イベントの企画・検討や研修の必要性などを確認している。

また、会を構成する農林漁業者等32名が体験型集客交流事業（体験メニュー）の講師等（インストラクター）として指導しているほか、地域の農林漁業者等の協力（サポーター）を得ながら実施している。

【体験型集客交流センターの設置】

体験型集客交流事業の円滑な運営には、都市住民等に向けたPRとともに、体験希望者とインストラクター、またインストラクター同士をつなげるコーディネーターの役割が必要であることから、平成15年10月に観光協会内に専任職員を配置した「体験型集客交流センター」を設置し、受付事務、イベント企画、PR活動をスタートした。（平成17年9月からは、町役場内に再配置している。）

【会に参加する主な組織、体験メニュー等の概要】

農業・農産物加工体験の中心である「ないぜしぜん村」では、観光ミカン園での農作業と柑橘ジュースづくり体験などを主に担っており、後継者のいないミカン園等を観光施設として有効活用している。

旧南勢町を全国に発信しようと様々な企画を検討する「てんぷな会」*てんぷな = 天賦な(地元の方言で、上等な・・と言う意味)は、「でこたん羊羹」、「鯛飯の素」、「長生き名人(海藻、竹酢液で育てた鶏卵)」など地元の農産物等を活かした特産品を開発販売している。

廃校となった旧相浦小学校を活用した宿泊交流施設「海ぼうず」は、郷土料理である「てこね寿司」、干物づくりなどの食体験や、刺し網漁、定置網漁などの漁業体験を相賀浦地域ぐるみで運営、提供するなど食育、体験交流の拠点となっている。



【てこね寿司づくり体験】

その他

「山庄水産」：なまり節（未乾燥の鰹節）の加工技術を提供

「伊勢志摩炭想会」：竹炭や竹炭せっけんづくり体験

「五ヶ所湾ダイビング」：スキューバダイビング体験

「志摩ヨットハーバー」：ヨット体験

4 むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

【農地等の有効活用】

後継者のいないミカン園等を観光施設として有効活用したり、特産品である「五ヶ所小梅」の販売促進など、農林水産業の維持と農地の保全を図っているだけでなく、会に所属する「農事組合法人：土実樹（つみき）」は、エコファーマーとして認定され、環境保全型農業に取り組んでいるほか、「ないぜしぜん村」においても無農薬栽培を行っているなど、これからの新しい農業の手法にも挑戦しているところである。

【農林漁業者による体験メニューの提供】

また、体験メニュー等を指導、運営するインストラクターは、主に地域内の農林漁業者であるため、本物の農林漁業体験を通じ、体験者の農林漁業、農山漁村に対する理解と親しみが深まるものと考えられる。

なお、体験料を取ることにより、インストラクターが経済的にも精神的にも負担を感じず、楽しく活動しながらも、自己の体験メニューに責任を持つことを狙いとしている。

【他産業、住民との連携】

インストラクター（会員）には女性、高齢者だけでなく、NPOや地域の食品加工企業も参画しているなど、地域の多様な産業、住民が連携しながらの地域づくりが実施されている。

5 むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

【増える体験者、リピーター】

平成15年8月のモニターツアーから今日まで2,133名の都市住民等が体験交流に参加し、平成16年春以降は、関西方面等から延べ17校の修学旅行生を受入れている。（H18.2月末現在）

100種類にのぼる各種体験メニューは、農林漁業者による「ほんもの」の体験であることから、三重県内からだけでなく、多くの人が集い、またその多くがリピーターとして参加するなど今後も拡大していくと考えられる。



[養殖えさやり体験]

【食育、地産地消を学ぶ】

また、エビ網漁体験やミカンの摘果作業体験などの体験メニューを地域の学校が総合学習に活用するなど、地域の暮らし、食文化を学ぶ貴重な機会となっている。

【地域の文化、誇りの再認識】

地域の農林漁業者等が、自ら自分たちの仕事、文化、生活を講師として教え、伝えており、参加者の感動を目にしたたり、リピーターが増えたり、また礼状などに目を通すことで、地域の誇り、自分たちの仕事に対する誇りを再認識することへとつながっている。

6 むらづくりに関する所見

【地域が主体となって地域づくりが進められていること】

都市住民等に提供する集客交流事業を地域ぐるみで展開していくための母体である「五ヶ所湾きらりふれあいの会」の必要性は、農林漁業者、自治会等、地域自ら導き出したもので、当初、参加会員数が伸び悩んでいた時期においても、一軒一軒足を運び、会の趣旨、目指すものを説明してまわった。

また、100種類にのぼる各種体験メニューづくりにおいても、会員一人一人に「何ができるか」「何がしたいか」を提案してもらい、価格等も無理が生じないよう検討し、ねばり強く作っていったものである。

このように行政からの押しつけでない、地域主体の取組であるため、今後も安定して継続していくものと考えられる。

【多様な業種、分野が一体となって地域づくりを展開していること】

南勢地区での「宿泊」を担う旅館組合の女将により組織される「南勢おかみの会」では、修学旅行生等の分宿に対応するため、同一料金分泊制度への試みや、郷土料理の提供などに取り組んでいる。

また、里山保全を中心に活動するNPO法人南勢テクテク会では、自然観察会などの講師を務めるだけでなく、会の活動としてハイキングコースの整備、古道発見など地域の資源発見にも努めている。

このように農林水産業者だけでなく、様々な業種、分野の人々が「交流による地域の活性化」を目指し、それぞれの「役割」、「できること」に応じて積極的に取り組んでいるこのむらづくりは、地域の活力、経済の発展にも大きく寄与していくものと考えられる。

【地域に誇りと自信を持った活動が展開されていること】

100種類にのぼる各種体験メニューは、地域の農林漁業者等が、自分たちの仕事、文化、生活を講師として教え、伝えている。

また、体験フィールドの付近の住民も積極的に体験者に話しかけたり、体験メニューをサポートすることも増えてきた。

この際、参加者の感動を目にしたり、リピーターが増えたり、また礼状などに目を通すことで、地域の誇り、自分たちの仕事に対する誇りを再認識することへとつながっている。